

附編 西日本の享保の飢饉供養塔

関根 達人

1. 泉蔵寺享保飢饉供養塔 【福岡県糟屋郡粕屋町】
2. 高原家墓地享保飢饉供養塔 【福岡県大野城市】
3. 龍徳院享保飢饉供養塔 【佐賀県佐賀市】
4. 源昌寺享保飢饉供養塔 【佐賀県鹿島市】
5. 川上神社跡享保の飢饉供養塔 【佐賀県藤津郡太良町】
6. 義農神社義農之墓 【愛媛県伊予郡松前町】

附編 西日本の享保の飢饉供養塔

①調査の目的と調査地

本研究では、青森県内で飢饉供養塔の悉皆調査を行い、その実態を明らかにした。これら北奥の飢饉供養塔の特徴をより明確にするためには、それとは異なる地域にみられる飢饉供養塔との比較研究が必要と考えた。本編で述べたとおり、北奥では、天明の飢饉に関する供養塔が圧倒的に多く、天保の飢饉に関するものがこれに次ぐ数みられた。通常、江戸時代の三大飢饉としては、天明・天保の飢饉に加えて、享保の飢饉の名前が挙げられる。天明・天保の飢饉がいわゆる冷害型の不作を原因とし、東北地方を中心に東日本に大きな被害を与えたのに対して、享保 17（1732）年に発生した享保の飢饉は、大陸から飛来した稲虫（ウンカ）による虫害型の不作に起因し、西日本一帯に被害が及んだ。発生した要因・時代・地域ともに異質な享保の飢饉に関連する供養塔が比較資料として候補にあがった。

享保の飢饉供養塔について、それをある程度網羅した上で、その特徴を明らかにした先行研究は見あたらなかった。そのため、本研究では、藤野達善氏による『飢人地蔵物語』を参考に、そのなかで紹介されている享保の飢饉供養塔のなかから地域的にまとまりのある資料を選び、実際に現地調査を実施することとした。現地調査は、福岡・佐賀で 10 件、伊予松山周辺で 5 件の飢饉供養塔に関して実施した。調査地は、本報告書に掲載したものを除き、福岡・佐賀では福岡市博多区東中州の川端飢人地蔵、同市早良区野芥円応院の地蔵、同区庄崎氏宅裏山の地蔵、佐賀市大財町仏心寺本州庶民餓死累葬之墓碑、大和町久留間蔵福寺の餓死諸亡霊塔、伊予松山周辺では松山市西垣生町常光寺の通称「うんか塚」、同市高井町長善寺の當郷餓死萬霊塔、東温市下林の別府の石造物群、伊予市双海町下浜の多層塔である。このうち、円応院と庄崎氏宅裏山の地蔵については、享保の飢饉との関連性を示す碑文はなく、仏心寺の墓碑は台風による水害で破損し原形をとどめていないため碑文は確認できなかった。

②福岡・佐賀の享保の飢饉供養塔

福岡藩の場合、享保の飢饉により田方 42 万 6600 石余が「虫付腐捨り」となり、収穫高は僅か 4 万 3200 石に止まったという（『黒田新統家譜』卷之二四、享保 17 年 9 月 29 日条）。享保の飢饉における福岡藩領内での人的被害状況に関しては、史料により大きな違いがあるが、全人口の約 2 割にあたる 6～7 万人が死亡した可能性が高い（註 1）。佐賀藩の被害はさらに甚大で、大田南畝が著した『一話一言』によれば、餓死・疫病死あわせ約 12 万人が犠牲になったとされる。

福岡県粕屋町酒殿の泉蔵寺境内に建てられた供養塔は、享保の飢饉の 3 年後、地元の若者が施主となり建てられた。供養塔のある場所は現在でも百人塚や飢人塚と呼ばれ、享保の飢饉供養塔の側には、同じく享保の飢饉の犠牲者の霊を慰めるべく地元の青年達が、大正元年と昭和 6 年に建てた供養塔 2 基が存在する。享保の飢饉の記憶が近代以降も人々に長く語り継がれたことを示す事例として注目される。

福岡県大野城市乙金の高原家墓所にある供養塔と佐賀市大和町東山田の龍徳院境内にある供養塔は、どちらも享保の飢饉やその後救民活動を行った庄屋層が、飢饉の犠牲者の

供養と、自ら（先祖）の事蹟を後世に伝えることを兼ねて建てたものであり、どちらかといえば後者に力点が置かれている。

佐賀県鹿島市山浦の源昌寺境内にある供養塔は、鎌倉時代以来この地方を支配し、江戸時代には佐賀藩の要職にあった深江氏が、知行地内で餓死した 180 人を哀れみ、享保の飢饉の翌年、菩提寺に建てたもので、領主層による撫民策の現われといえる。

佐賀県太良町川上神社跡地にある供養塔は、享保の飢饉の 50 回忌にあたる安永 9 (1780) 年、再びこの地方を襲ったウンカが退治されることと、五穀豊穡を祈願するため、地元の有力者層により建てられた。繰り返されるウンカの被害を前にして、享保の飢饉の犠牲者の供養と「毒虫退治耕作豊饒」という現世利益とが結びついたことを示す事例といえる。

③伊予松前の義農之墓

西日本の各藩から幕府に提出された被害状況報告によれば、伊予松山藩における享保 17 年の取箇（年貢収穫高）は皆無で、被害の大きかった伊予八藩のなかでも最悪の状況であった。松山藩の人的被害状況については、『虫附損毛留書』に、藩から直接老中へ報告した数値として餓死人 3489 人（11 月 19 日付）、「京大坂其外所々より来状留」の数値として 5705 人（12 月 13 日付）の記載がみられるが、それは実態とかけ離れた少ない数値である（註 2）。とはいえ、同じ『虫附損毛留書』に記録された西日本 11 ケ国の大名 39 家における餓死者の総計 12172 人と比較した場合、結果的には松山藩の人的被害が西日本全体の半数近くを占めるとの報告がなされたことになる。その報告から間もない享保 17 年 12 月 19 日、松山藩主松平定英は幕府からその責任を問われ、出仕停止を命ぜられた（「有徳院殿御実紀」）。翌年 4 月に許され謹慎が解かれるものの、定英は一月後の 5 月 21 日に急死してしまう。享保の飢饉は松山藩にとって前代未聞の大惨事であると同時に、松平氏による治世に消し去りがたい「汚点」を残したのである。

愛媛県伊予郡松前町筒井の義農神社境内にある義農之墓と呼ばれる石碑は、享保の飢饉から 45 年後の安永 5 (1776) 年、享保の飢饉の犠牲となった義農作兵衛の顕彰を目的として藩主松平定静の命により建てられた。高さ 220cm、幅 110cm、厚さ 50cm もの大石を使い、表に「義農之墓」の文字、裏には藩儒丹波成美の撰による作兵衛を顕彰する碑文を刻む。碑文には、翌年の播種用の麦種 1 斗を持ちながら、それを食することを拒み死んでいった作兵衛の行動を美化し、彼を義農として後世に伝えようとする領主側の論理が貫かれている。この石碑は、享保の飢饉の傷跡が完全に払拭された約半世紀の後も、藩主松平氏の側では依然として、その時に幕府から受けた「御呵」や謹慎処分が忘れたくとも忘れることのできない不名誉として認識され続けており、そうした「負い目」を払拭すべく建てられたと考える。すなわち、作兵衛の偉業を強調し、それを顕彰することで、多数の領民を見殺しにしたという事実から人々の視線を逸らし、犠牲となった領民を撫恤する理想的な領主像が創出されたのである。

註 1 柴多一雄 1994 「享保の飢饉と藩体制の転換－福岡藩を中心に－」『九州文化史研究所紀要』39 181～215 頁

註 2 高市晋 2002 「享保の飢饉における餓死人について－『虫附損毛留書』の検討を中心に－」『人文学論叢』4 愛媛大学人文学会 41～54 頁

1. 泉蔵寺享保飢饉供養塔

所在地:福岡県糟屋郡粕屋町酒殿 泉蔵寺境内
藩政区画:福岡藩領旅石触酒殿村

位置 (1 : 25000)



[1] 本体法量(cm) 高 : 102 幅 : 45 厚 : 33
上段法量(cm) 高 : 17 幅 : 50 厚 : 50
下段法量(cm) 高 : 20 幅 : 73 厚 : 75

[2] 造立年月日

享保二十 (1735) 年二月

[3] 形状

不定形

[4] 造立者 (括弧内は勸進僧)

酒殿村若者中

(泉蔵寺十二世精蓮社進譽)

[5] 信仰等

浄土宗徳鳳山泉蔵寺

[6] 共存の石碑等

個人墓7基、地藏1基、無縁供養塔1基、
石灯籠2基、石祠1基、大正元年造立の享
保飢饉供養塔1基、昭和六年造立の享保
飢饉供養塔1基

[7] 備考

当供養塔は「百人塚」・「飢人塚」など
と呼ばれている

梵字のキリークは阿弥陀如来を表してい
る

当供養塔は町指定文化財である

[8] 文献

藤野 1985

遠景



正面



近景



正面



裏面



正面拓本



裏面拓本



正面刻字

飢死諸精靈等

享保龍集乙卯二月

精蓮社進譽

施主

若者中

酒殿村

裏面刻字

享保十七壬子秋蝗災枯苗稻穀不實鄉里窮餒亦疫
厲起益社稷崇坎不可知而餓死病死之長幼骸骨充
于街巷其數不可稱計嗟上村中老少一百九十三人
或有遇知識結緣或徒埋路邊泔畔可哀可悲粵某甲
勸者志口為之追悼集縑索而修一七日別時念佛仰
願(因)此功德當邑及國中死亡之靈速到安養界極無
量樂(焉)故建一基石碑聊勤意樹遙傳來葉云爾

大正元年造立の供養塔 正面



正面刻字

口百八拾年享保壬子歲大饑餓孚横途
 本年當第三回之壬子乃諸青年諸氏諸
 區內有志普請僧衆與建施餓鬼會讀誦
 三部妙典以薦罹災群靈之冥福矣
 願以此功德平等施一切同発菩提心往生安樂國

裏面刻字

大正元年壬子十月廿日
 當住佛譽諦
 當區青年中

昭和六年造立の供養塔 正面



正面刻字

時昭和六年享保壬子之
 慘禍ヲ去事貳百歳ニ相
 當ス於茲一村協力シテ
 横死者追福之爲大施餓
 鬼會ヲ修建ス
 部落青年男女記念營爲
 石碑之基石ヲ造シ聊
 口追善ノ志ヲ表ス
 昭和六年九月吉日廿九世照譽
 青年會
 主婦會
 處女會

2. 高原家墓地享保飢饉供養塔

所在地:福岡県大野城市乙金 高原家墓地内
藩政区画:福岡藩領下大利触乙金村

[1]本体法量(cm) 高:108 幅:61 厚:37
台石法量(cm) 高:20 幅:82 厚:70

[2]造立年月日

天保二(1831)年春三月

[3]形状

不定形

[4]造立者

乙金村保正高原善蔵

[5]信仰等

なし

[6]共存の石碑等

個人墓34基、石灯籠3基、法名碑1基、先祖一家諸精霊古骨塔1基、報効紀年碑1基

[7]備考

天保二年は享保飢饉の百回忌にあたる
乙金村は享保十七(1732)年に餓死者五十人余を出した

寛保二(1742)年に庄屋善一郎が飢饉に備える費用捻出のため、藩有林五十三町余の払い下げ運動に成功した

文政四(1821)年から庄屋善蔵が救民仕組を願い出て、同十一年まで実施した(角川日本地名大辞典編纂委員会編 1988)

[8]文献

藤野 1985

位置(1:25000)



近景



正面



正面刻字

享保
丑子
餓死枯骨塔

右側面



右側面刻字

天保二年歲在年辛卯春三月
乙金村保正高原善蔵建
宜春戸次晁誌并書

裏面



裏面拓本



裏面刻字

享保十七年九州大饑本州最甚田卒為汗菜餓孚相望於
 道者數萬人翌年罹疫死者亦數萬人闔國死者至十萬人
 云三笠郡乙金村保正高原善一郎義武方飢歲適有天幸私田
 奇贏則數口足無以飢矣里中死者五十餘人善一郎躬自甞
 勉為之營葬數年後隣里枯骨暴露于中野者極多躬自口
 拾穿墳掩骼乃請僧侶使誦經以助冥福但承凶荒凋弊餘
 不遑及建片碑是歲值其百年忌辰官與白金若干於各
 郡寺院使以莫其厲鬼郡廳亦興銀以助焉善一郎子和作其
 子善四郎為里保正數年矣告老後再為大利村保正以其
 當有功為大保正刊年殆七十尚克輕健其子善藏為今保
 正能繼父祖志欲建片碑以紀其事併請僧侶誦經以為冥
 資初私田奇贏則數口足以無飢者雖有天幸乎抑積善
 陰隲之所致歟不然何以世世子孫
 為里保正如斯其久乎哉

3. 龍徳院享保飢饉供養塔

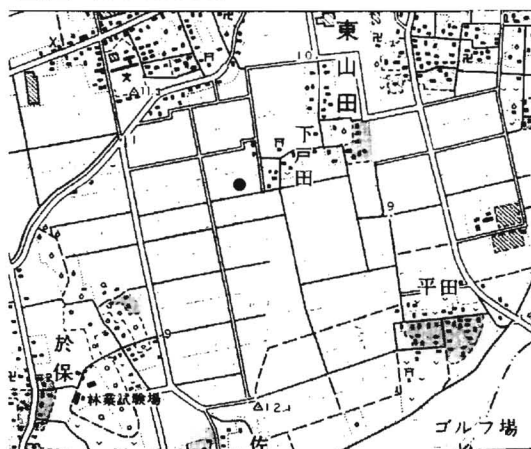
- [1] 本体法量(cm) 高 : 78 幅 : 28 厚 : 27
 上段法量(cm) 高 : 17 幅 : 42 厚 : 40
 中段法量(cm) 高 : 17 幅 : 52 厚 : 46
 下段法量(cm) 高 : 14 幅 : 85 厚 : 84
- [2] 造立年月日
 不明
- [3] 形状
 擬宝珠付平頭角柱
- [4] 造立者
 中原(仲蔵)
- [5] 信仰等
 臨済宗瑞雲山龍徳院
- [6] 共存の石碑等
 六地藏、地蔵3基、三界万霊塔1基、大乘妙典
 千部供養塔1基

- [7] 備考
 佐保川嶋郷の大庄屋は平野村の庄屋中原
 氏が世襲していた
 大庄屋中原只右衛門尉正純(忠蔵)は、
 享保の飢饉で亡くなった人々の供養塔を
 当寺に建てた
 側面には「享保十七年から十八年につ
 けて飢饉となり、藩主も藩庫を開いて救援
 米を出したが救えず、諸国貴賤を問わず
 飢えに苦しんだ。中原正純も救援に尽く
 したが力及ばず、郷内餓死者のために餓
 死塔を1基建立した」と記されていたよ
 うだが(藤野 1985)、現在、両側面(特
 に右側面)は風化のためほとんど判読
 できない
 当供養塔は町指定文化財である

- [8] 文献
 藤野 1985

所在地: 佐賀県佐賀市大和町東山田 龍徳院境内
 藩政区画: 小城藩領佐保川嶋郷平野村

位置 (1 : 25000)



近景



正面



正面



左側面



右側面



正面拓本



左側面拓本



右側面拓本



正面刻字

佐嘉郡佐保河嶋鄉内
凡男女貳千六百四十餘人餓死塔
無主孤魂無邊幽靈等

左側面刻字

康夫自享保十七壬子同到十八年癸丑五
穀不登歲既飢饉太守憐雖倉庫不能救
闔國飢無貴無賤累累然餓死巷路者不可抗數乎
茲中原只右衛門(良)為佐保河嶋鄉司職(臆)之至
切早造立一基石(圖)吊鄉内餓死貪鬼
遂(成)良

右側面刻字

三十三
應奉重之深志者也(可)龍德
諸被德水(會)之塔供(相)絕
水(會)怠慢不可有之者也云
(龍德)謹誌中原(仲藏)

4. 源昌寺享保飢饉供養塔

- [1] 本体法量(cm) 高: 117 幅: 36 厚: 31
 上段法量(cm) 高: 30 幅: 53 厚: 50
 下段法量(cm) 高: 20 幅: 77 厚: 74
- [2] 造立年月日
 享保十八(1733)年晩冬腰日
- [3] 形状
 平頭角柱
- [4] 造立者(括弧内は勸進僧)
 深江氏
 (源昌寺十二世諦蓮社誠誓)
- [5] 信仰等
 浄土宗光明山源昌寺
- [6] 共存の石碑等
 六地藏、個人墓2基、馬頭観音像1基、地藏1基
- [7] 備考
 享保十八年は享保飢饉の一周忌にあたる
 深江氏は、鎌倉時代より約300年間深江
 (現長崎県南島原市深江町)の地頭職を
 務めた
 天正十二(1584)年、主家の龍造寺氏が
 島津・有馬氏との戦いに敗れた際当地に
 至る
 藩成立後、深江氏は家老などの要職を務
 めた
 当寺は同氏の菩提寺である
- [8] 文献
 藤野 1985
 鹿島市教育委員会 1985『鹿島市文化
 財ガイドブックとふるさとの歳時』

正面



所在地: 佐賀県鹿島市山浦 源昌寺境内
 藩政区画: 佐賀本藩領能古見郷山浦村

位置 (1: 25000)



遠景



近景





碑誌

夫盛衰者衆生之業感而宿因最薄則必遇非常之變矣去歲壬子西海道田稼蝗災至于今茲春黎民之困苦不可勝言嗚呼時耶命耶

三界萬靈六道四生等

深江氏領内老少男女病死餓死者百八十人於是領主不堪哀憐建一箇石塔俱會魄於一處爲拔苦與樂之資云爾

□享保十八龍集癸丑晚冬臘日 當山十二世諦蓮社誠譽誌焉

5. 川上神社跡享保飢饉供養塔

所在地:佐賀県藤津郡太良町多良 川上神社跡
 藩政区画:佐賀本藩領鹿島郷多良村

- [1]笠法量 (cm) 高: 23 幅: 46 厚: 43
 本体法量(cm) 高: 64 幅: 27 厚: 19
 上段法量(cm) 高: 19 幅: 39 厚: 33
 中段法量(cm) 高: 14 幅: 53 厚: 47
 下段法量(cm) 高: 10 幅: 78 厚: 64

[2]造立年月日

安永九(1780)年

[3]形状

石祠

[4]造立者(括弧内は勧進僧)

大宮司 杵本太門以下七名

(金泉寺法印賢長)

[5]信仰等

川上神社 旧祭神 豊玉姫命

[6]共存の石碑等

金比羅大権現碑1基、石祠1基、天照皇大神碑1基、題目碑1基、豊受大神碑1基、
 「川上社」鳥居扁額、鳥居部材、墓石部材

[7]備考

安永九年は享保飢饉の五十回忌にあたる金泉寺とは、太良岳頂上にある太良岳神社(上宮)の神宮寺であり、共に真言密教の霊地として栄えた

川上神社は昭和四十六(1971)年、町内の他2社と共に太良岳神社(下宮)に合祀された

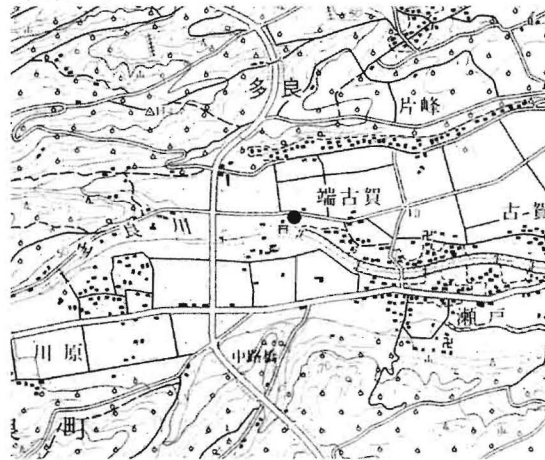
一石五輪塔や宝篋印塔と思われる石塔の部材が多数存在するため、当地は中世から続く墓地であったと思われる

梵字のウンは、阿閼如来を表している

[8]文献

藤野 1985

位置(1:25000)



遠景



正面



近景



正面



正面拓本



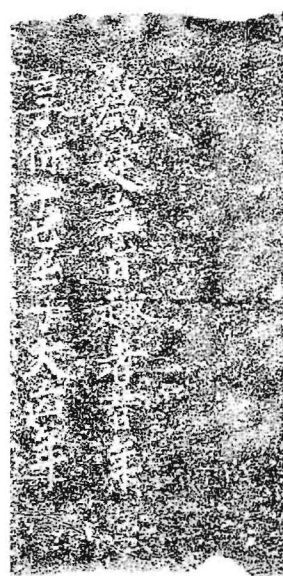
正面刻字

五穀善神

左側面



左側面拓本



左側面刻字

爲建立旨趣者昔年
享保十七壬子大凶年

裏面



裏面拓本



裏面刻字

後經星霜事四十有九
當安永九庚子田虫頻奢
惱人魂歎餘建石祠有
神靈擁護者後歲必

右側面



右側面拓本



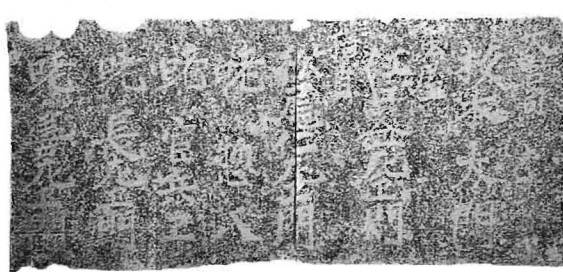
右側面刻字

毒虫退治耕作豊饒也
 仍新奉勸請志願如上
 金泉寺
 法印賢長代

台石



台石拓本



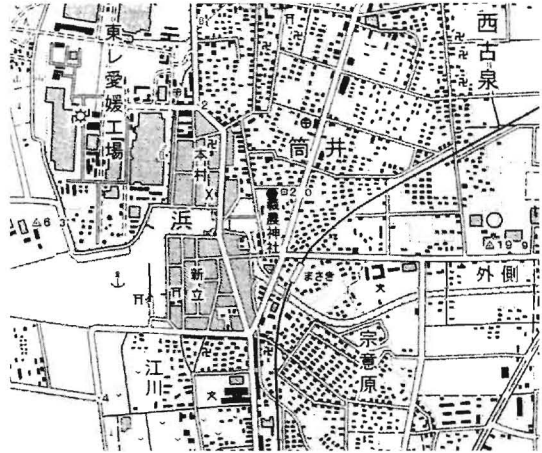
台石刻字

大宮司
 杵本太門
 庄屋
 江口益左門
 横目
 松尾仁左門
 咄 惣八
 咄 官兵左
 咄 長左門
 咄 善左門

6. 義農神社義農之墓

所在地: 愛媛県伊予郡松前町筒井 義農神社境内
藩政区画: 松山藩領筒井村

位置 (1:25000)



- [1] 本体法量(cm) 高: 220 幅: 110 厚: 50
台石法量(cm) 高: 23 幅: 170 厚: 74
- [2] 造立年月日
安永五 (1776) 年夏六月
- [3] 形状
不定形
- [4] 造立者
松山藩主松平定静
- [5] 信仰等
義農神社 祭神 義農作兵衛
- [6] 共存の石碑等
玉垣、線香立て、花立2本
- [7] 備考
筒井村の百姓作兵衛は享保十七 (1732) 年の大飢饉に際し、飢えに苦しみながらも麦種を枕にして餓死した
安永五年、八代藩主松平定静は作兵衛の義を称え、藩儒丹波成美に命じて碑文を作り、墓碑を建てて顕彰した
作兵衛の死後百五十年目にあたる明治十四 (1881) 年には、当地に義農神社が建てられた
- [8] 文献
藤野 1985
内田九州男ほか 2003 『愛媛県の歴史』
山川出版社

遠景



正面



正面刻字

義
農
之
墓

近景



裏面拓本



義農姓某名某稱作兵衛伊豫國松山府之下邑筒井農夫也稟性朴實剛介素勵其業焉享保十七年秋蝗為災甚郡邑救荒之政不暇施捨囊而離散者尤多矣作兵衛獨憂麥田之不易奮然忍餓餓自耕數十畝將播麥種精力衰耗根狼還家困頓特甚遂潰死隣人諭曰子之命在且暮而有麥種滿囊中者盈食之而免死乎作兵衛怫然作色曰吾食不可食之食則何有至于此也夫百穀播種而納租稅者民之職也官費資焉君子祿焉國人庇焉然則穀種之貴重非吾命之可此矣故民國之本穀種農之本也若肆然而盡之則來歲將何以濟國用拒食穀種則吾之志而口欲以報國也吾守死而已兵汝勿復言氣息奄奄遂枕麥囊而死矣則九月二十三日也國人感其義氣合稱曰義農同邑老宿載作兵衛且記其事者今尚在焉須即官曾丑佳貞者其墓詳其實以白于